

小川 糸著 『ライオンのおやつ』

(ポプラ文庫)



三十三歳の私、海野雫が末期癌で余命宣告され、瀬戸内海に浮かぶ小島のホスピスでその生を終えるまでの一ヶ月を描く小説、というといかにも深刻だが、物語は海の明るさと、セラピストたちの無償の愛に満ちあふれている。

「ライオンの家」では入居者が最後に食べたいおやつをリクエストでき、ヘルパーの手で再現される。またおやつに纏わる思い出が皆に披露される。けれど雫がリクエストしたおやつが出たときはもう食べられなくなっていた。それでもおやつに纏わる懐かしい人々が登場し、過去の人間関係の齟齬や軋轢が氷解してゆく、という大人の童話だ。

あったかいけど少し甘いなあ、と思いつつ読み進めていたが、読了後はとても良い夢をみせて貰った気分である。死者には決して語ることでできない生の終焉を、この上なく美しいものと信じる著者の魂の清らかさに打たれたのだ。登場人物の語る台詞で記憶にとどめたいものが沢山ある。「こちら側からは出口でも、向こう側から見れば入り口になります」は大いに頷いた一例。

(木畑紀子)

造幣博物館

(大阪府大阪市・造幣局本局構内)



先日大阪を訪れた際、宿泊先のホテルから徒歩圏だったため、造幣博物館を訪れた。展示も然る事ながら、なによりまず博物館の洋風建築が目を引いた。もともとは造幣局のための火力発電所だったという。現在では、地球温暖化を招くため、縮小傾向にある火力発電だが、大阪の市街地の広大な土地で、川のほとりという水運のよい場所に発電所があったとは。質の悪い貨幣が大量に出回り、経済が混乱した江戸幕府末期。明治政府がそこからの転換をめざすべく、目玉政策のひとつとしたことが分かる。

館内には、国内外の貨幣の歴史に始まり、最近の記念硬貨、国民栄誉賞の盾やオリンピックのメダルなどが飾られており、こんなにもさまざまなものを造幣局で作っていたのかと驚かされる。中でも目を引くのは、古代中国の貝貨。始皇帝が統一した真ん中に穴の開いた半両錢以前のものである。中にはとても小さなものや先端がとがったものもある。持ち歩くうちに壊しそうとか使いづらそうとか、余計な心配をしながら見てまわるのも楽しい。

(早川晃央)